
SPhinX

瑛彪・玄彪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sphinx

【Nコード】

N3483B

【作者名】

瑛彪・玄彪

【あらすじ】

Sphinxとは、SP（SecurityPolice：要人警護、警護官）とスフィックス（伝説の生物または怪物）の掛詞。只今休載中、夏に復活予定でした。気長にどうぞ。

2 - 1 夜桜

月の綺麗な夜である。

月光は余すところなく夜を照らす。

公園の中とて例外ではない。

子どもらが賑やかに遊びまわった遊具達が、昼間の騒々しさを影に封じたように、ひっそりと立つ。

その中で満開の桜が、ぼうつと咲いている。

咲ききった桜は、風もないのにちらほらと花びらを落とす。

花びらは月光の中をくるくると舞い、木の下ベンチに降る。

そのベンチにふたり、男と女が腰掛けていた。

2 - 2 公園

男は10代半ば、男と呼ぶには早い幼さが残る。

学校帰りなのか、学ランを着ている。

喉まで絞めた詰襟から伸びた顔には、目覚め始めたりりしさの中に、まだあどけなさを留めている。

しかし何やら深刻な表情で、物思いに沈んでいる。

男はふと、人一人分空けて腰掛けている女の方を見る。

彼女も制服姿である。

こちらは女という言葉がそのまま似合う、大人っぽさがある。

きちんと両脚をそろえ、両手もスカートの上に重ねられている。

腰掛けているのが、雨ざらしの木のベンチではなく、どこかの国の玉座であるかのような、気品漂う座り方。

寒さが残る春、彼女はコートを着ている。

細身のコートは身体の起伏をくつきりと描き出す。

その陰影は、旅人を惑わせる夜の砂漠を髣髴させる。

肩を滑らかに流れる黒髪が、月光を撥ねて銀に輝く。

その合間からのぞく白く整った顔は、空を見上げたまま、男の方を見ようとしめない。

まるで、人形だ。

男が心の中で、ぽつりと呟く。

はらり、と男の視界を横切るもの。

目で追うと、それは男の膝に舞い降りた。

桜の花びらだ。

はらり、はらり

降ってくる花弁を手に受け、男は桜の木を見上げる。

天高く昇りつめた満月が、彼と桜を正面から照らしている。

夜桜。

なぜだろうか。

こんなにくつきり照らされているのに、桜の花は霞んで見える。

夜、桜を見るたびに、男はいたたまれない気持ちになる。もどかしい気持ちになる。

それと同じぐらい得体の知れぬもの・・・

「伊賀、くん」

名前を呼ばれ、はっとする。

いつの間にか女がこちらを見ていた。

「何でしょう、先輩」

多少棘のある口調で、男が応じる。

そんな男をなだめるように、女が云う。

「こんな夜更けになるまで待たせておいて、ごめんね。・・・私、待ってたの。ずっと。この時を」

何を？ と男が首をかしげる。
しかし女は、それには答えない。

「ねえ、伊賀くん？」

女が呼ぶ。

幼子がほしいものをねだるような甘えた声で、
それかも知恵をつけ初めた幼子のような、小賢しさが透ける声で。

「・・・私と、契約、してくれない？」

「契約？ 何ですか、それ？」

突拍子もないことを云われて、たじろぐ伊賀。

「契約と云ったら契約よ…わかるでしょ」

ふふふ、と女が含み笑いをする。

冷やかな月光が、彼女の顔に浮かぶ笑みを曝け出す。
実に妖艶な笑み。

獲物を見つけた猫のように、女が男の方へにじり寄って来る。

彼女の息が荒い。

目がギラギラとして、今にもかぶりつきそうだ。

どうも、様子が、おかしい。

そこで伊賀の中である考えが閃いた。

ひょっとして…先輩の云う「契約」って「契る」ことか？
あの、古文でよく見る、男女の「契り」ってやつか？！

ベンチの後ろは深い茂み、ベンチの前には人気のない公園。
つまり、誰もいない公園でふたりつきり…。

なんてベタな展開なんだ！

「いや、先輩、それはよくないです。僕はまだ中2だし…」

ベンチの真ん中に座っていた伊賀は、先輩から離れようと右へずれる。

「14歳になられたのでしょうか。もう十分役目は果たせる歳です」

女が男にずり寄る。

「でも、ここ公園だし…」

また伊賀がずり下がる。

「どこでもいいのです、あなたさえいれば…」

また先輩がずり上がる。

とうとう伊賀は、ベンチの端っこに追い詰められた。

迫り来る、先輩の燃えるような瞳。

長いまつ毛の影が落ちる、上気した頬。

柔らかで、桜色の唇がぱっくりわれる。

彼女の息が顔にかかる。

甘い匂い。

その香りで頭がクラクラしたその時…

「ぬあああにスケベ面してんだあ！！」

威勢のいい声がするや否や、激しい衝撃が左顔面を襲った。

次の瞬間伊賀の身体は宙を飛び、固い地面に叩きつけられた。

2 - 3 月光

「つつうゝ!!」

呻きながら起き上がって見ると、なんと、伊賀はベンチから数メートルも吹っ飛ばされていた。

「な・・・」

「なにをするっ!」

ベンチから立ち上がった先輩が、伊賀に向かって叫んだ。

凄まじい殺気。

その迫力に、伊賀は青ざめた。

わけがわからないので、尻もちをついたままあたふたするばかり。

「え、いやっ、あの・・・ごめんなさい!」

とりあえず土下座。

自分の影に頭を擦りつける。

と、伊賀は、自分の横に伸びている影に気づく。

恐る恐る正面を見ると、先輩は自分の前にいる。

彼女が睨^{にら}んでいるのは、彼でなく、彼の背後。

白い顔の血の気が引いて、更に白くなっている。

その表情を見て、伊賀の背筋がつうつと冷たくなった。

すぐ後ろに、誰がいる。

しかも、とんでもなくヤバそうな奴が・・・！

その時背後から、女の声が凜と響いた。

「『なにをする』だって？ それはこっちの科^{せりふ}白だ」

伊賀は反射的に、声のする方を振り返る。

そこには女がいた。

月明かりを背に、すつくと仁王立ちした女が。

すらりと長身。

長くたなびく髪が、月に染められて金色に光っている。

月があんまり眩しいものだから、顔は影になってわからない。

腕組みした細い腕、それに絡む細い指。

くびれた腰からしなやかに垂れるスカート、そこから伸びた脚は、堂々と地を踏みしめている。

彼女もまた、伊賀たちと同じ中学の制服姿だ。

先輩が恨めしげに唸る。

「よくも、邪魔してくれおって…」

「さて、」

女が、足で砂地をざつと音を立てて擦り、構える。

「邪魔はどちらなのか、思い知らせる必要があるようだな」

風もないのに、女の長い髪がゆらゆらと陽炎のようにゆれる。
女の身体から気炎が昇っているのだ。

伊賀は、その気迫がただならぬのを、動物的直感で察知した。

こいつはマジでヤバイ・・・！

「先輩、逃げた方が……」——「っ?！」

先輩の方を振り返った伊賀は、愕然とした。

彼女の身体に異変が起こっていたのだ。

首が前に突き出し、腹の辺りまで落ち込む。

異常なほどに曲がった背中のコートから、無数に角が突き出す。
空をつかもうとあかく手には、次から次に鱗が生える。

「ぐっ……げえ……がはっ」

身体が波打つたび、長い髪の間こうから苦しい声が聞こえる。

その声は、洩れるたび低くなっていく。

このままじゃ、先輩が怪物になってしまう・・・

「先輩!!」

伊賀が駆け寄ろうとする。が、足に何か引っかかって転んでしま
う。

それでも起き上がって進もうとしたが、足を引っ張られているの

に気づく。

足元を振り返ると、小さな影がズボンの裾をつかんでいる。

「うわっ」

振り払おうとする伊賀を、男の声が制した。

「ここから動くな」

のしかかるように重く、低い声。

思わず動きを止めた伊賀の足元で、小さな影がむくりと頭をもたげる。

それは、少なくとも見た目は、幼児だった。

髪は陽の光を思わせるような黄金色^{こがね}。

ふわりと前髪がかかる、大きな瞳が、無表情に伊賀を見つめる。
そのぷっくりした小ぶりの口から、不釣合いに低い声が、再び発せられる。

「貴様、死にたくないだろう。」

伊賀は、いきなりそいつの胸ぐらをつかんだ。

「お前は、あの女とグルなのか」

幼児は、ズボンの裾を放さず答える。

「そんなとこだな」

ズボンがずり上がるのも構わず、伊賀は鬼のような形相で幼児を引き寄せて問い詰める。

「お前らっ、先輩に何をした?！」

そいつは、顔色一つ変えずに淡々と答える。

「あいつの^{へんげ}変化は、別に俺らが何かしたわけではない。静かにしろ」
ちらりと先輩の方へ目を遣る。

「もともと、借りていた化けの皮がはがれて、やつの本性が現れただけだ」

「化けの皮…本性…?」

そうこうしているうちに、先輩は完全に人間の形を失っていた。

「それじゃあ先輩は一体…?!」

「一言で云うなら、化けモンだ」

「じゃあ、お前らは——」

伊賀の問いは、咆哮にかき消された。

2 - 4 振動

公園一帯をびりびりと揺るがす遠吠え。
それを発しているのは、先輩だったもの。

これが本当の先輩自身なのか・・・。

この状況を目の当たりにして、伊賀は夢現実^{ゆめうつ}。

そんな伊賀を背で庇い、幼児がささと宙に指を滑らす。
簡素な模様が浮き出て、そのラインがふわりと広がり、幼児と伊賀を包み込む。

低く、うねるように続く咆哮は次第に、人語となった。

「いない・・・どこだ・・・どこにいった?！」

みしみしと首を振る。

動きに合わせて、てらてらと鱗が光る。

「どこだぁー！どこにいるうー！?！」

腸が切れるのではないかと思うぐらい憐れを誘う声を、さめのように鋭い歯がみっしり生えた口から搾り出す。

カバのような大きい鼻で辺りを嗅ぎまわりながら、公園を隅から隅まで睨み回している。

伊賀を見つけ出そうと躍起になっているのだ。

「さあ、どこだろう」

女が涼しい声で、ゆつくりと云った。
怪物が女を刺すように睨む。

「どこだ、どこに隠した!!」

女に、鱗を逆立てて詰め寄る。

それを女は風に吹かれたように、ふらりとよける。
よけられても、怪物は女に迫り続ける。

「あと少しだったのに……!」

「何が『あと少し』だ」

女が、あくまでも落ち着いた声で云う。

「お前は形だけを真似るだけ。

むりやり自分のものにしても、それは形だけのもの。
あいつがシンからお前のものにはなることはないし、
もう、もとのあいつに会えることさえできないのだ。
・・・それがまだわからぬか」

怪物は怒りのあまりか、ぶるぶる震え始めた。

噛みしめた口から、ぎしぎしと歯の鳴る音がする。

「わからぬようだな」

女は、ほうつとため息をついた。

幼児は、怪物が女につられて遠ざかっていくのを確認し、振り返って伊賀に忠告する。

「いいか、何も云うんじゃないぞ。
一応姿と臭いは遮断している。だが、振動——声までは防ぎきれない。」

あれはお前の声に異常に敏感だ。
見つかりたくなかったら、黙ってる」

伊賀はうなずいて返事した。

「わかった。――あつ」

伊賀は全身の血の気が引いた。

「云ったそばから……」

幼児がふつとため息をついて、怪物のいる方を向く。

女が伊賀からなるべく遠ざけていたが、その苦労の甲斐なく、すでに、カッと見開いた双眼が、彼を捕らえていた。

その眼は縦に裂け、顔の半分ほどの大きさになっている。残り半分を占める口がきゅっとつり上がる。

「見つけたぞ……」

眩くなり、伊賀めがけて突進する怪物。

足がすくんで動けぬ伊賀。

もうだめだ

伊賀が目を閉じたその時…

伊賀の顔を、さらりと撫でる髪の毛の感触。
目を開けると、あの女の背中があった。

「ひろあ」

女が背中中、幼児に呼びかけた。

幼児が女に問う。

「いるか」

「いる」

「なん」

「おう」

瞬時の奇妙なやりとりの後、女が桜に向かってずっと手をかざし、
静かに唱えた。

「おつらたんぱくねつ
櫻乱爆裂。」

すると、女と怪物の間で閃光が走った。

「！」

淡く、しかし強烈な桜色が視界を奪う。

同時に爆発音。

顔を庇う伊賀を、爆風が揺さぶる。

甲高い悲鳴。それが長く尾を引きながら遠ざかる。

続けて、ズシン、という振動が地面から伝わってきた。

それを最後に一連の騒がしい物音が収まった。が、辺りにさらさら・・・と、せせらぎのような音が満ちている。

伊賀の顔に、ひたひたと何かが降ってくる。

次第に伊賀の目に視界が戻る。

伊賀は、桜の豪雨の中にいた。

それはしばらくすると止み、桜の花びらで敷き詰められた公園が現れた。

ブランコ、ジャングルジム、ベンチ、そして伊賀にも花びらが積もっていた。

女は、伊賀の目の前に仁王立ちしていた。

すぐそばまで迫っていた怪物の姿は、見当たらなかった。

どこからか、呻き声が聞こえてきた。

女が積もる桜を踏みしめ、公園の一角に進む。

彼女の向かう先に、一際こんもりとした桜の塊があった。

彼女が近づくと、それがぞわぞわと蠢き始めた。

「……っ、……っ」

桜の合間から見えるそれは、あの怪物だった。
よほどのダメージを受けたらしく、息が浅い。
もう、身体を動かすことさえままならない様子だ。

女は、うずくまる怪物まであと数歩のところで足を止め、抑揚のない声で云った。

「思い知れ。そして、二度と伊賀に近づくな」

よろよろと身体を起こした怪物は、それでも伊賀にすがりつくように見つめる。

伊賀はそんな視線にたじろぐ。

「……っ、あと少しだったのに」

怪物の影がゆらりと動いたかと思うと、怪物はすうっと消えてしまった。

怪物に積もっていた花びらが、崩れるように地へ散る。

後は、夜の公園があるばかりだ。

いや、女と伊賀がいるばかり。

「……怪我はないか」

云いながら、女が振り向いた。
その顔を見て、伊賀は驚いた。

「……先輩?!」

そう、その顔は、先ほど怪物に成り果てた先輩の「化けの皮」とそっくりであったのだ。

啞然とする伊賀を見て、女は苦笑した。

「驚くのも無理はない。あいつは私の姿を借りていたのだから」

2 - 5 名前

女は膝を着いて挨拶する。

「改めて。こんばんは、伊賀くん」

伊賀は、呼ばれてもぽかんとしたままである。

「おい、伊賀くん」

目の前で手をひらひらとしても反応ナシ。

今度は伊賀の耳元に口を寄せる。

「伊賀、柚也^{ゆじや}あゝ！」

「わわああああ！」

伊賀がのけぞった。

「やっと我に返ったな」

ほっと胸をなでおろす女から、伊賀が飛び退く。

「さっきのはなんなんですか！

これはなんなんですか！

あなたはなんなんですか！！」

「これって俺か」

幼児がぼそつと呟く。

「なんなん、と連発されても・・・」

女が苦笑する。

しかし伊賀は真剣にパニック状態だ。

「まあまあ落ち着いて。少しずつ話そう」

女はベンチに歩み寄り、花びらを払って座り、伊賀に席を勧めた。

「お隣、どおぞ」

「大丈夫だ、私は襲ったりしない」

伊賀が、ノラ猫のように警戒レベルを最大にして、ベンチの端に縮こまっている。

それを見て、女は笑う。

「先ほどの奴は、お前を自分の臣下にしたくてしょうがなかったのだ」

「臣下？」

「そう。主従関係を結ぼうとしていた。家系、いや種類によって、その関係を成立させる内容・態様は異なっている。」

「奴の場合・・・主となるものが従となるものの影を喰らうことがある。」

「影を、喰らう？」

「影は様々な意味を持つ。」

「簡単に云うと、もう一人の自分だ。主の魂と直につながっているからな」

「女が足先で自分の影をつつく。」

「もう月にはベンチの後方に進んでいる。」

「奴はそのなかで、お前の感情・意志・その他、『伊賀柚也』を形成する要素を取り上げようとした」

「女が伊賀を見る。」

「お前を自分に忠実な奴隷にするために。」

「じゃああの『契約』って云ってたのは・・・」

「伊賀は絶句した。」

「期待がはずれてショックか」

女がからかう。

「そ、そんなんじゃないよ！ あ」

敬語で云い直そうか否か迷う伊賀を見て、
にまつと女が笑む。

「構わん、敬語のない方が話しやすい」

複雑な表情でうつむく伊賀。

「顔が一緒でも、もう『先輩』じゃあないんだな・・・」

「そうだな」

女は伊賀から目を逸らす。

「お前、歳は」

「14」

「今日なった。そうだろう？」

「そっだよ」

「お前の場合は14歳が『成人』だ」

伊賀が女を見る。

「ああいった奴らが、お前と『関係』が持てる対象となる」

「じゃあ、僕はこれからずっと、ああいった怪物に狙われ続けるの？！」

「怪物だったり、人間だったりな」

「げ。」

しかもさっき、関係を成立させる内容・態様はいろいろあるって云ってたよね」

「そうだ。」

相手の同意を得て契約するものもあれば、有無を云わさない強引なものもある。

ちなみに、」

女は、怪物の消えた場所に目をやる。

「さっきのタイプは、強引に契約できない。だから、お前と親密な関係になって契約に持ち込むつもりだったのだろう」

にやりと女の口がつり上がる。

「そのために、お前好みの美しい女に化けたのだ」

「自分で云うなよ」

伊賀が口を尖らせた。

しかし、向き直って、真剣な顔で女に云う。

「とりあえず、今夜がどれだけ危なかったか、よくわかった。」

「助けてもらってすごく感謝してる」

「いや、当然のことをしたまでだ。」

「私はお前の保護者だからな」

「さらっと女は云った。」

「?! 保護者?」

「面食らった顔をする伊賀を見て、また女は笑む。」

「保護者といっても、お前の母親ってわけではないぞ」

「当たり前だ! ってか一瞬そうも思ったけど・・・
じゃあ何?」

「云わば、お前のSPってところかな」

「へえっと感心する伊賀。」

「でもどうして、そんな私が僕のところに来たの?」

「お前が危なっかしいからだ」

「どっからそんなこと...」

「風の便りだ」

「他にどんなことができるんだ？」

「そんなのいちいち説明できない」

「出身どこ？」

「・・・もうじき夜が明ける。今日はここまでだ」

興味津々の伊賀を引き剥がして、公園を出ようとする女。

「待つて」

伊賀が引き止める。

女が振り返る。

「名前、教えて」

「いいだろう」

女が、いつの間にか足元にいる幼子に声をかける。

「ひろあ、」

幼子が、女を振り仰いでにらむ。

「んあ？　なんだ？　おまえ、さつさと名乗れよ」

「そつだな」

苦笑して、女は伊賀のほうに向き直る。

傾いた満月が、彼女の顔をくつきり照らす。
思わず身構える伊賀。
ごくつと彼の喉が鳴る。

女は一字一字、噛み砕くように云った。

「私の名は卒美。

まにしたかみ
馬西卒美だ」

2 - 6 教室

「何ボケツとしてるんだあ？」

不意に顔を覗き込まれて、伊賀は椅子ごとひっくり返る。
予想以上の反応に、覗き込んだ相手も目を丸くしている。

「おおつ、すっげえコケっぷり。
いつの間に腕上げたんだ？」

「コントじゃねえよ！
マジびつくらこいたじゃないかつ
久谷くたに！」

空っぽの教室に、伊賀の声が響く。

ここは、物原中学2 - B。
昼食が終わって、昼休みタイムである。
天気がいいので、ほとんどの生徒が外に出て行き、教室の中はガランとしている。

「まったく、わざわざ何の用だ。お前は隣のクラスだろうが」

伊賀は転げた椅子を起こし、座りなおしながらぐちる。
久谷の方は、教室の窓の外を眺めている。
明るい日差しが差す校庭からは、生徒たちの賑やかな声が聞こえる。

「いやあ、春ですなあゝ。殿」

「何を今さら。」

桜も散りかけ、春も終わりだぞ」

「いえいえ、云っているのは伊賀殿の春っすよ」

「？」

伊賀が久谷を見上げると、彼はいたずらっぽい笑みを浮かべている。

くしゃくしゃっと丸まった彼のテンパ頭が、そよ風で楽しそうに揺れている。

「昨晚、先輩と何処行つたのかなあゝん？」

「昨日?? 僕と先輩が??」

伊賀が面食らった顔をする。

「なあに すつとぼけてるんだよ！」

昨日この親友と一緒に帰ろうつて云つたのに、

『先輩と約束があるから』なんてつれなくしたのは誰だ？」

伊賀はますます不可解な顔をする。

「・・・親友つて、誰？」

今度は真顔で久谷が聞く。

「マジで、何があつたのか？」

何もなければ、本の虫が、本をほっばらかして外を眺めているなんてことないだろ」

伊賀は自分の手を見る。

読みかけの推理小説が開いたまま載っている。

「変な夢を見ただけだ」

小説をパタンと閉じて、両手を頭の上に置く。
そんな伊賀を、久谷は目を細めて見つめる。

「うひょーっ 夢で終わっちゃったのか？！」

さては、ふられたな？

いや、それはないか

先輩の方がぞっこんだんだんだし

お前、何かしたんだろ」

「ごちゃごちゃうるせーよっ」

バンツ と両手を机に叩きつける伊賀。

さすがにこの剣幕に吞まれた久谷は、話題転換。

「・・・っそだ！

知ってるか？

おととい、お化け屋敷が燃えちまつたらしい」

「ふん」

「あのでかい庭付きの邸宅が全焼だぜっ」

「すげえ大火事だったろうな。

さぞ見物だったろうに」

「それがさ、誰もそんな火事、なかったって云うんだ」

「ふうん・・・」

「誰も、炎なんて見てないんだ。

119通報もなかった。

不思議だろう??」

一生懸命気をひきつけようとする久谷を、伊賀はインチキ魔術師を見るような目で、ちろりと見上げる。

「ホントに燃えたのかよ

てか、その日燃えたんじゃないんじゃ?」

「いや、あそこの前を毎朝ジョギングするおっさんがいて、そのおっさんが第一発見者なんだが、

昨日の朝はちゃんといつも通りだったと証言してるらしいぞ」

「お前、そのおっさんと知り合いなのか?
やけに詳しいじゃないか」

ち、ち、ち、と指をふる。

「新聞というものを見ないのかね、殿は」

再びむっとする伊賀。

慌てて窓から飛び降りて、久谷は伊賀を手招きする。

「せっかくの天気だ。教室から出ようぜ。

図書館まで散歩しよう！」

2 - 7 小路

物原中学校は緑が多いことで知られている。

多いというか、多すぎる。

すぐそこは市街地なのに、構内はさながら森林。

草木がないのはグラウンドだけであるといっても過言ではない。
したがって、校舎を出れば簡単に森林浴ができるというわけだ。

きらきらと木漏れ日を受けて、伊賀と久谷は図書館への小路を辿る。

「通るたびに思うんだけどさあ、

もうここら辺って、登山道だよな。

って、ここ平らじゃ〜ん！ 何云ってんだ俺。

・・・お、蝶だ」

しきりに話しかけてくる久谷に、伊賀は返事もしない。

ただ黙々と歩いている自分の足を見ている。

「あ」

久谷が立ち止まる。

伊賀も立ち止まって、前方を見る。

一人の女子生徒が歩いてくるところだった。

長い髪を颯爽と風になびかせ、ゆったりとした歩調でこちらへ向かって来る。

先ほど話題になっていた「先輩」だ。

久谷はそつと伊賀の顔を見る。

伊賀は女子生徒をみつめたまま動かない。

「あ、俺先行くわ

図書館の新刊雑誌んとかいる」

久谷は気まずい顔でそう云うと、さつと右手の小路へっていった。

「今の子は、お前の友達か？」

久谷の後姿を見送りながら、女が和やかに尋ねる。

「うん。小学生の頃からの友人」

「いわゆる幼馴染ってやつか」

「そう」

残された伊賀と向かい合う女・・・「先輩」でなくて、馬西だ。

「夢・・・じゃないんだね」

ゆっくりと伊賀が問う。

馬西の顔が厳しくなった。

「夢だ、と私がここで云つても、

昨夜起こったことは夢にはならない。

未練がましい思いは捨てろ」

「未練がましいとか、そんなんじゃない」

伊賀は頭を振る。

「『先輩』はいるのに、『先輩』がいないなんて・・・頭がこんがらがりそう」

「そのうち慣れる」

素っ気ない相槌に、伊賀はかちんときた。

「それよりも、気になることがあるんだけど」

「なんだ」

「僕、『先輩』の記憶がないんだ」

真剣なまなざしで告げる伊賀を、ちらりと見やって、たった一言。

「そうか」

むっとする伊賀。

「そうか、って、それだけ？ 人一人に対する思い出が丸ごとないんだよ?!」

伊賀は馬西に食いつく。

それを馬西はさらりと払う。

「そんな思い出、あってもしょうがないだろう」

「そんな、って・・・」

馬西のひとことひとことに、がつんがつんショックを受ける
伊賀は、もはや顔色を失っていた。

そんな伊賀に、馬西は背を向けた。

「そんなにあいつのことに執着するのなら、あいつの正体がどんな
ものか教えてやる」

はっとして伊賀は馬西を見る。

馬西の声が、怒気を含んだ声だったから。

「来い」

後ろを振り返りもせず、馬西はずんずん小路を歩き出す。

伊賀は、何だか申し訳ないことをしたような気がして、おとなし
く馬西に続いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3483b/>

SPhinX

2010年10月11日16時30分発行